

ラーニング・コモンズ

——公立はこだて未来大学の事例——

小山和伸、北村隆之、中野宏一

はじめに

本稿は小山和伸、北村隆之、中野宏一の3名が、経済貿易研究所の助成を受けて、公立はこだて未来大学の「情報ライブラリー」を訪問した成果に基づく共同調査研究報告である。訪問に際しては、同ライブラリー司書の栗谷禎子氏と教務課教務・図書担当主査の寺崎皇紀氏には大変お世話になりました。記して感謝申し上げます。

なお、今回の共同調査ではロシア国立極東大学函館分校をも訪問・調査したが、本報告では割愛する。

1 ラーニング・コモンズの背景

さまざまな情報の電子化が、Kindle や iPad などの携帯端末の登場との相乗効果により、急速に進展している。誰でも容易におびただし量のデジタル情報にアクセスできる。図書館不要論の所以である。米国においては、すでに1990年代に図書館に危機意識が生じた。事実、入館者数と図書の貸出し数の減少が続いた。

そのような危機意識の中から米国で生まれたのがインフォメーション・コモンズ（情報化への対応図書館）であり、さらにはラーニング・コモンズ（学習支援への積極的対応図書館）への展開なのであった。この間の詳細については、米澤誠氏（東北大学）の次の論文が有名である。

・米澤誠「インフォメーション・コモンズからラーニング・コモンズへ：大学図書館におけるネット世代の学習支援」『カレントアウェアネス（No. 289）』2006年9月20日

米澤氏はラーニング・コモンズの事例として、「マサチューセッツ大学アマースト校」について、次のように説明している。ここにラーニング・コモンズのエッセンスを読み取ることができるので、少し長くなるが引用させていただく。

「マサチューセッツ大学アマースト（Amherst）校のデュボア（Du Bois）図書館は、2005年に改修を行いメインフロアにラーニング・コモンズを設置した。さまざまな大きさのテーブルに対して250の座席を配置し、164台のPCを設置している。1台のPCに1～3席のテーブル（これを「スタディ・ポッド」という）を59組、1台のPCに6席のスタディ・ポッドを6組配置している。また、6席のスタディ・ポッドを個室化したグループ学習室を13室設置している。

ラーニング・コモンズは、支援デスク、レファレンス・研究支援デスクなどのサービスポイントが設置されているほか、学内の他組織との連携により、学習上・就職上の指導・アドバイスを行うコーナーやライティング指導コーナーも併設し、多岐にわたる学生の学習支援活動を行っている。

飲食に便利なよう、同じフロアにはカフェがある。飲食に関する制約は緩和されており、密閉できる飲食物であれば、館内に持ち込むことができる。また、ラーニング・コモンズは、静粛な学習エリアではないと利用規則に断っている。」

ラーニング・コモンズの現実形態は、時代状況と各図書館の事情により異なるであろうが、要は紙媒体の図書・雑誌を揃えてそれらの閲覧場所を提供するという図書館、換言すればハードとしての図書館が、電子図書・電子ジャーナルなども取り込んで紙媒体と電子媒体のハイブリッドな図書館に変身した形態である。

ラーニング・コモンズはそれだけに留まらない。伝統的な図書館にも「レファレンス・コーナー」はあるが、ソフト面については固定概念を払拭して、利用者の目線に立って徹底的に柔軟に対応しようとする。例えば、文献の検索以外の学生の多様な質問にも即答できるような体制も整えている。具体的な一例を挙げれば、就職活動中の学生がライブラリーのパソコンで就職関係の情報検索中に質問事項が生じたら、ライブラリーから就職課への直通電話を使用できる体制を整えるのである。

その結果、伝統的な図書館では「静謐と沈黙」が支配してきたが¹⁾、ラーニング・コモンズでは、キーボードを打つ音に加えて、さまざまな音を容認するために、「静粛な学習エリアではない」と利用規則で断ることになる。

2 公立はこだて未来大学の事例

日本の図書館にも、ラーニング・コモンズの波が遅ればせながらやってきた。東京女子大学、御茶の水女子大学、公立はこだて未来大学などがその例である。

今回の調査対象である公立はこだて未来大学は、2000年4月に開学した「システム情報科学部」のみの単科大学（入学定員240名）である。

受験者はオープン・キャンパスその他によりこの大学の特徴を知っているので、パソコンの扱いにはかなり習熟している。入学直後に全員に一定の仕様のノート型PCを購入させて、個人研究に、共同研究に積極的に使用しており、「情報の共有」などに役立っている。情報の共有は、この大学では特に重視されており、校舎そのものが、情報の共有を念頭に設計されている。

この大学の校舎は斬新な設計で有名である。校舎全体がガラス張りで（写真1）、学内の演習室の壁面もガラス張りなので、通路から演習室の様子が見える。特筆すべきは、「スタジオ」、「プレゼンテーション・ベイ」と称されるオープン・スペースが設けられていることである（写真2）。このスペースの利用に際しては、大学当局への申請は原則的には不要であり、授業時間外でも自由に使用できる。ハード面でもソフト面でもオープンな思想が活かされている²⁾。このスペースで面白そうなこ

1) 原田広「3世代の図書館」『図書館だより (No.130)』神奈川大学図書館、2010年4月、6頁。

2) 椿本弥生「ケース・スタディ：公立はこだて未来大学」山内祐平編『学びの空間が大学を変える』ポイックス、2010年、136頁。

写真1 公立はこだて未来大学の校舎



撮影：北村隆之（2010年10月12日）

写真2 同大学のオープン・スペース



撮影：写真1と同じ。

写真3 同大学の情報ライブラリー入り口



撮影：写真1と同じ

とが行われていると、誰でも気軽に参加できる。実際そのような思想で設計されているのである。それらのオープン・スペースから教員の研究室の内部が透明なガラス壁を通して見えるという設計になっている。この「見える」ということが、教員にファカルティー・ディベロップメントの機会を提供している³⁾。

斬新な設計は斬新な教育思想から成り立っている。この教育思想とは、ラーニング・コモンズである。公立はこだて未来大学は、大学全体が、いわばラーニング・コモンズなのである。

さて、今回の調査対象である同大学の「情報ライブラリー」(写真3)は、単科大学の図書館であるから、規模そのものは大きくない。この図書館の役割を理解するためには、はこだて未来大学そのものを理解しなければならない。

「情報ライブラリー」の役割は次のとおりである⁴⁾。①図書の所蔵・所在はOPACを使って調べることができる。②雑誌は、ブラウジング・コーナーと学術雑誌架にある。③データ・ベース・電子資料は情報ライブラリーのホームページから利用できる。この限りでは、格別な特徴はない。

図書館の一般的なラーニング・コモンズ思想は、コンピュータ時代の本格的な到来に対応すべく、図書館がラーニング・コモンズ体制をとり、図書館が大学のラーニング・コモンズの中心的な存在となる、という方向性である。これに対して、公立はこだて未来大学の場合は、決定的に異なる。同大学は、大学全体がラーニング・コモンズなのであり、図書館はその一翼を担っているにすぎない。

人という文字が、互いに寄りかかる姿を象徴しているように、人間はそれぞれの個性ある能力を相互に利用し合いながら歴史を刻んできた。家庭、企業、公共部門という組織も、「情報の共有」を中核において機能している。公立はこだて未来大学は、大学の将来像についての確かな方向性の一つを提示している。

3) 同上書、135頁。

4) 「利用案内」公立はこだて未来大学情報ライブラリー。